

行雲流水

No. 3 6 2 令和6年1月18日発行

「ヤクーバとライオン」

校長 寒河江 正人

生徒諸君。「**勇氣**」とは何だろうか。

舞台は、アフリカ奥地の村。

その村の少年は、ある年齢になると、ひとりでライオンを見つけて立ち向かい、槍で倒さなければならない。

ライオンを殺せば、一人前の若者として認められ、榮譽ある兵士と認められるという。

主人公の少年、ヤクーバは、まさにその年齢になった。

ヤクーバは、ライオンを求め、照りつける太陽の下、荒野を歩き、ライオンに出遭う。

だが、ライオンは傷を負い、力尽き、立つことができぬほどに弱っていた。

ヤクーバにとって、そのライオンを仕留めることは容易だった。

その時、ライオンの目は、ヤクーバに語りかける。

「見てのとおり、わしは傷ついている。」

（中略）

おまえには、2つの道がある。

1つは、わしを殺して、いっばな男になったと言われること。

（中略）

もう1つの道は、殺さないことだ。

（中略）

どちらの道を選ぶか、それはお前が考えることだ。」

さて、生徒諸君。ヤクーバは、「**どの道**」を選んだと思う？

ライオンが「**語りかけた言葉**」は、あえて（中略）にしてみた。

この本がフランスで出版された1994年。

アフリカ、東欧、中東、中央アジアでは、民族・宗教の対立による血で血を洗う紛争が繰り返されていた。殺された側は、報復のために相手を殺す。終わりのない報復の連鎖。だからこそ、ヤクーバへの**ライオンの問いかけ**の意味は、重いのだ。